

平成三十一年度 高等学校入学試験問題（本科 IN選抜）

国語

【受験上の注意】

- 一、受験番号、氏名は必ず記入してください。
- 二、解答はすべて解答用紙の所定のところへ記入してください。
- 三、用紙は使いやすいように折ってもかまいませんが、破らないようにしてください。
- 四、解答用紙、問題用紙とも持ち帰らないでください。
- 五、退出の際は、解答用紙を裏にして、その上に問題用紙を置いてください。

| | | | |
|------|--|----|--|
| 受験番号 | | 氏名 | |
|------|--|----|--|

(答えはすべて解答题紙に書きなさい。)

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

何百年、何千年という長い歴史の中で培われてきた人間と動物の関係が壊された後には、何が現れるのだろうか。ぼくはもう十年以上前に、ヴァンダナが家畜について書いた文章を読んで、ショックを受けたことがある。それは二〇〇三年の終わりから、翌年初めにかけて、世界中が鳥インフルエンザをめぐるパニックに陥っていたところだ。その時だけで、アジアを中心に一億にものぼるニワトリが「殺処分」されたといわれる。ヴァンダナは、こういう病気が発生する背景として、われわれ人間が、ニワトリたちをどう扱ってきたか、にこそ注意を向けるべきだ、と言った。

ケージにぎゅうぎゅう詰めにしたニワトリは、電気による人工的な光を浴びながら、餌を食べつつける、卵と肉の製造マシーンと化している。これ以上ないというくらい不健全なこれらの生きものたちをなんとか生きながらえさせているのは、大量に「トウモロコシ」される抗生物質などの薬品だという。

それぞれの生きものには、それが自分らしく生きるのに必要な最低限の条件というものがある。それが奪われた時、その生きものに何が起こるのだろうか。ヴァンダナによれば、その生命は、混乱し、不安定化し、

劣化し、さらに暴力化する。家畜に見られる「とも食い」現象はその表れだという。ニワトリがくちばしで突つき合い、放っておけば、相手が死ぬまで攻撃してしまう。それでは困ると、養鶏業者は、あらかじめニワトリのくちばしを抜いておくことにする。でも、それが問題の本当の解決であるはずはない。

ヴァンダナは、ここからさらに一步踏みこんでこう言った。こんなふうに人間が家畜に対して暴力的であることと、人間同士がお互いに対してますます暴力的になっていくことは、深く関係しているにちがいない。家畜に起こっているのと同じことが人間の世界でも起こっているのではないか。つまり、他者に向けられた暴力であるテロも、自分に向けられた暴力である自殺も、ともに、生きものである人間が、人間らしく、生きものらしく、自然と調和して生きていくために必要な、最低限の条件を奪ったり、奪われたりしていることの結果ではないのか。

ヴァンダナはこうつけ加える。そうだとすれば、①「テロに対する戦い」なるものも、問題の解決どころか、とも食いを防ぐためにニワトリのくちばしをあらかじめ抜いておく、というくらいの意味しかもちえないだろう、と。

科学者でもあり、哲学者でもあるヴァンダナ・シヴァによると、自然界に対する人間のこうした暴力的な態度は、一七世紀から現代にいたる近代科学の中に根づいた「人間対自然」という二元論からやってくるも

のだ。そこでは、切り離された人間と自然が、一方は上位で、他方が下位というふうには、「優劣」「強弱」「上下」の関係におかれる。

近代科学は、それまで「母なる大地」や「神聖な生命」として敬われていた自然を、「機械」や「資源」という単なる「モノ」に変えてしまった、とヴァンダナは言う。イ万物を産みだし、育む、たくましい母親のようだったそれまでの自然は、生命力を失い、受け身一方で、操作可能な単なる「モノ」へと落ちぶれてしまった。ただの「モノ」になっしまえば、もう、それまでのように、「自然を敬え」とか「自然を汚してはいけない」とかと、人間が自分自身に言い聞かせてきた「倫理的な制約」もすべてとり払えることになる、と。

そして、^②それこそが、科学技術の²ヒヤクを可能にしたのであり、経済の急速な成長による富の増大を可能にしたのだった。そして自然界の生きものたちは単なる生産マシンと化して、ウツらむばかりの人間の欲望を満たすために奴隷のように奉仕させられることになる。

ヴァンダナはそこで、もうひとつの重要な視点をつけ加えている。近代科学の基になった、「自然に対する人間の優位と支配」という新しい関係は、「女性に対する男性の優位と支配」という人間相互の新しい関係と密接に関係している、というのだ。この考えはエコ・フェミニズムという名前で知られる。それによると、近代以降、世界中で進んだ^Iと、女性に対する蔑視、差別、暴力とは、切っても切れない関係にある。

「男は強くて、女は弱い」というイメージがきみの内にもあるかもしれ

ないね。弱音を吐いたり、泣いたりすると、「男のくせに」と言われ、はきはきと意見をいったり、反論したりしただけで、「女のくせに」と言われたり。いずれも、社会に広く受け入れられている「男らしさ」や「女らしさ」のイメージに反しているというわけだ。

もちろん、今では男女平等という考え方が広まっていて、日本でも、公の場での女性に対するあからさまな不公平や差別は少なくなったように見える。しかし一方で、男性が女性を単なる性的な欲望の対象として見たり、その人の体を人格と無関係な単なる「モノ」のように扱ったりする³ケイコウはなくならないどころか、メディアではむしろエスカレートしているようにも見える。女性に対する「虐待」と呼ばれる精神的、身体的暴力もあとを絶たない。

「強い人間対弱い自然」や、それと密接に関係している「強い男性対弱い女性」という困った二元論から抜け出すことなしに、人類の幸せな未来はない、というヴァンダナの考えに、ぼくは共感する。

こういう困った二元論から抜けだすためには、どうしたらいいのだろうか？

その筋道を見つけないことこそが、本書の目標だと言ってもいい。ここではとりあえず、すでにこれまでの話を通じて見えてきたことを、「三つの筋道」としてまとめておきたい。

まず第一の筋道として、弱い者の視点にたってみる、ということ。弱

者の身になる、と言ってもいい。すぐに思い浮かぶのは、二六歳の若さで死んだ童謡作家の金子みすゞのことだ。

たとえば、彼女に「大漁」という作品がある。漁港の町の朝、人々がイワシの大漁を祝っている。

浜は祭りのようだけど

海のなかでは

何万の

鱈いわしのとむらい

するだろう。

みすゞは祭のような賑にぎわいから、ふと、**Ⅱ**をずらして、たくさんの仲間の命を奪われた魚たちの悲しみの方に思いをはせている。

みすゞが同情を寄せるのは生きものばかりではない。降り積もる雪を見て、彼女は思う。「上の雪さむかるな」、「下の雪重かるな」中の雪さみしかるな（「積った雪」）

「なまけ時計」という作品では、みすゞはネジ巻式の柱時計の身になって考える。家の人々がみな休んでいる日曜日にも、なんで自分だけせつせと働き続けなければいけないのか、と。そう思いながら、時計は昼寝してしまふ。でも、やがて……

なまけ時計はみつかつて、

きりきり、ねじをねじられて、

ごめん、ごめん、と鳴り出した。

みすゞが描く世界では、強い側に立っているのはいつも、自分自身を含む人間たち。その人間の暮らしは、多くの生物の犠牲や無生物の奉仕によって成り立っている。それはしかたのないことだと思っただけでも、彼女には、どうしても^③「すまなさ」の意識をぬぐい去ることができなかったのだろう。

「大漁」では、海の中のイワシたちの**Ⅲ**を想像してみることで、彼女は、イワシたちのために祈った。「かりゅうど」という作品では、他の狩人より先回りして、杉でできた「みどりの鉄砲」で鳥たちを驚かせて、逃がしてやる少年を描いた。

どうやら、みすゞにとつての童謡とは、あのアメリカ大陸の先住民や^④賢治と同じように、「世界に耳を澄ます」ための方法であり、弱者の側へとコミュニケーションの橋をかける方法だったようだ。

（辻信一 『弱虫でいいんだよ』 筑摩書房）

問一、——線1く3のカタカナを漢字に直しなさい。

問二、——線アくウの漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

問三、——線①『テロに対する戦い』なるものもくといくらいの意味しかもちえないだろう」とはどういうことですか。最も適切なものを次のアくオの中から選び、記号で答えなさい。

ア、家畜に対して人間が行う暴力行為と、テロを起こす人間の暴力は同等のものであり、愚かなことであるということ。

イ、人間同士の戦いを未然に防ぐために、お互いの武器をあらかじめ取り上げておくことは、無意味でしかないということ。

ウ、テロのような暴力行為を、さらに暴力によって解決をしようとすることは、根本的な解決にはならないということ。

エ、人間が自分らしく生きるために、互いの主張をぶつけ合うことが暴力に発展することは、あってはならないということ。

オ、人間が全ての生きものに対して暴力的であることと、テロのような暴力行為が起きることの因果関係が重要であるということ。

問四、——線②「それ」とは具体的にどのようなことですか。四十五字以内で答えなさい。(句読点や記号を含む場合は、一字に数えます)

問五、Iには、どのような言葉が入りますか。最も適切なものを次のアくオの中から選び、記号で答えなさい。

ア、生物虐待

イ、男女同権

ウ、自然破壊

エ、奴隷支配

オ、民主主義

問六、IIには、どのような言葉が入りますか。文中より漢字二字で探し、抜き出しなさい。

問七、——線③『すまなさ』の意識」とはどのような意識ですか。五十字以内で答えなさい。(句読点や記号を含む場合は、一字に数えます)

問八、IIIには、どのような言葉が入りますか。最も適切なものを次のアくオの中から選び、記号で答えなさい。

ア、行列

イ、奉仕

ウ、同情

エ、祭礼
オ、葬式

問九、——線④「賢治」とは宮沢賢治のことです。宮沢賢治の作品を次

のあくオの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、『トロッコ』

イ、『しろばんば』

ウ、『高瀬舟』

エ、『銀河鉄道の夜』

オ、『吾輩は猫である』

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

予報によると、明日はよく晴れるらしい。

ラッキー。

甲田貴子^{たかこ}はリュックの中から折り畳み傘を取り出した。降らないと決まれば、一つでも荷物は減らした方がいい。それでなくとも、荷物を背負って八十キロ歩かなければならないのだ。しまいの方では肩が凝り、背中が凝る。リュックが上半身と一体となって、汗で境界線がなくなる。

ついに三回目の「ピクニック」が来たか。

ベッドの上であぐらをかいて、明日の荷物の準備をしていた貴子は、勉強机の前にかけてあるカレンダーを見た。この「ピクニック」が終われば、カレンダーもあと二枚。卒業式を除けば、事実上学校行事は全部終わるのだ。そしてそれは、受験勉強一色の生活に突入するということでもある。それまでは思い出作りを口実に先送りしてきたのが、もはやどこにも逃げ隠れできなくなる。

とうとう、西脇融^{とよむ}とほとんど口をきかないままここまで来ちゃったな。

カレンダーをぼんやり眺めているうちに、そんなことを考えた。

あの春からもう三年近く経っちゃったんだ。

貴子は制服の衿^{えり}の隙間から忍び込む冷たい風を感じた。

早春の雨はひどく冷たく、誰かが泣いているみたいだった。

赤い傘が目に見えぬ。

女ものの赤い折り畳み傘を持ち、母親の肩を抱いてじつとこちらを睨みつけていた融。その瞳には、はつきりとした非難の色があった。この二年半、あの瞳が片時も貴子の中から消えたことはない。

思えば、あれは入学式の前の日だった。お父さんってば、全くどんぴしゃのタイミングで逝ってくれたよな。

貴子は溜め息をつきつつ、裁縫箱を引き寄せて、後回しにしていたハチマキを洗々縫い始めた。どこのクラスも、お揃いのハチマキやTシャツを作っている。貴子のクラスでは、ハチマキを統一することにした。誰の趣味で選んだのか、派手な蛍光色のドピンクだ。そこにクラス名と名前を縫い込むのである。

三十七組。貴子の学校は、単純に学年とクラスの番号を並べた二桁の数字がクラス名になるのだ。つまり三年七組である。貴子の出席番号は十四番。

そして融は三十番。

まさか三年になって同じクラスになるとは。九クラスもあるから、まず同じクラスになることはあるまいと、Aたかをくくつていたのだ。

ところが、あの朝。外に張り出されたクラス名簿を見た時、自分の名前を見つけたかと思ったら、続けてパツと西脇融の名前が目飛び込んできた。あれを見てどんなにびっくりしたことか。そして貴子がふと横

を見ると、彼女と同じようにあぜんとした顔で名簿を見上げている少年の顔を人だかりの中に見つけたのだった。

西脇融は信じられない、という表情で貴子の名前を見ていた。まじかよ、と唇が動くのが見えた。

それはこつちの台詞だよ、と貴子は心の中で毒づいた。

西脇融と同じクラスになったよ、と言った時、あらそう、としか母は返事しなかった。それ以降、お互いに一度も彼の名前を口にしたことはない。

やっぱりまずいよね。仲良くなかなれないよね。

クラス名簿をめくって、同じクラスの中にある二人の名前を見るたび、貴子はいつも繰り返す心の中で呟く。

それ以来、貴子はクラスの中でいつもそっと融を盗み見ていた。誰も気付かないようにそっと。見ていないふり、気にかけていないふり、全く意識していないふり。少なくとも、貴子はそうしているつもりだった。融は貴子のことを無視しているように見えたが、それでも刺すような視線を感じるがあった。

①時々馬鹿らしくなり、融に話しかけてみようと思う時もあった。

あたしたちがいがいが必要はどこにもない。あたしたちは、それぞれの母親の手前、相手を憎んでいるふりをしなければならぬという義務を感じているだけなのだ。なぜだろう。どうしてこんな演技をし続けているんだろう。これしか手段はなかったんだろうか。お母さんは、本

当にあたしが融を憎むことを望んでいるのだろうか。

②ハチマキの布地は、つるつるして針を通しにくかった。

自由歩行、誰と歩こうかな。

ゆつくりとハチマキを縫いながら、貴子は明日のことを考える。メグは走って言うてるしなあ。体力残ってれば一緒に走ってもいいけど、マジで走られると困るなあ。

卒業生も貴子たちも、ただ「ピクニック」と呼んでいるが、正式には北高鍛錬歩行祭というB大仰な名前が付いている。名前は大仰だが内容は単純で、全校生徒が丸一昼夜かけてえんえん歩くだけの行事である。早朝学校を出発し、一年一組から順番に二列歩行で歩き始める。深夜、仮眠所に到着するまでの約六十キロは団体歩行。1キユウケイを取りつつ、ひたすら歩く。そして、二時間ばかり仮眠を取ったあとは自由歩行だ。ここから先はマラソンである。全校生徒は千二百名近くいるのだが、走った人数の数だけ順位がつく。運動部の生徒にとっては、ここでベストテン入りするのは名誉なこと、上位の方では毎年熾烈な争いが繰り広げられている。大多数の生徒にとっては、脱落せずに踏破することが目的だ。あまりにも遅いと後ろから救護用のバスが追ってきて、どんどん拾い上げられていってしまう。このバスに乗せられることは、生徒たちにとって何よりも耐えがたい屈辱である。

【中略】

予報によると、明日はとて素晴らしい天気らしい。

そいつはよかった。高校最後の「ピクニック」だからな。

西脇融は歯を磨きながら腰を回してみる。ぐき、とどこかが鳴った。思わずいてて、と力をゆるめる。

自由歩行、走ろうかな。それとも、たらたら撃と歩こうか。

融はずつと迷っていた。一年、二年と三十位以内をキープしていたので、今年もその辺りに入りたいという気持ちもあつたが、撃やテニス部の連中は、ゆつくり喋りたいと言う。高校行事最後でもあるし、みんなと喋りながらゴールしたいという気持ちも否定できなかった。

明後日の朝、起きて決めればいいや。

融は2ゴウカイにうがいをすると、顔を洗って自分の部屋に戻る。

早いな。あつという間だったな。

「ピクニック」が終わればもう、入試だ。

それは融にとって最後通牒のようなものだった。中学卒業の春に父親を亡くしてからというもの、融は早く大人になりたいとずっと願っていた。早く大学に行き、早く就職し、早く母親を楽にさせたいと思っていた。ようやく最初の関門を突破できる時が近付いているのだ。ここまでの日々は、楽しいけれどもうんざりするようなぬるま湯の日々だった。

母親が、縫ったハチマキにアイロンを掛けてもってきてくれた。

蛍光ピンクのハチマキの「37」の数字を見る。

融は、自分が甲田貴子と同じクラスになったことを母親に話さなかった。今でもそのことを口にしたことはない。

クラスの名簿を見て母親も気付いているはずだが、二人ともこの件に関して口に出したことはなかった。もっとも、赤の他人について何を話し合う必要があるだろう？

甲田貴子を自分のきょうだいだと考えたことは一度もなかった。

同じ学年で同じ高校に進学したと知った時も、不思議な感じがしただけだ。まさか三年で同じクラスになるとは思わなかったけれども。

融は荷物を詰める手を休め、窓を開けた。夜の冷たい空気がゆっくり流れこんでくる。

頭を出して空を見ると、ア漆黒の静かな星空が広がっていた。

貴子と自分の関係を知る者は誰もいない。貴子の方も、誰かに話している気配はなかった。彼は極力無視する態度を取っていたが、この居心地の悪い状態がいつもどこかで気に掛かっていた。二人は口裏を合わせて黙っている のようだった。

おかしなことに、そんな自分と貴子の間に噂が立っていた。そのことを友人から聞かされた時には仰天したものだ。

おまえと甲田って、出来てるんだって？

③ 面食らうのと同時に、みんながよく見ていることに驚いたものだ。自分と貴子の間に、口に出さなくとも奇妙な緊張感のようなものがあるこ

とに気付いている。その理由に思い当たる人間はいないだろうし、説明することもないだろうが。

もう三年近く経つんだな。

融はあの雨の朝を思い出す。初めて貴子と顔を合わせた日の朝を。

貴子は不思議そうな顔をして自分を見ていた。初めて見る珍しい動物みだいに。その無邪気とも言えるあどけない表情に、どうしようもない苛立ちを覚えたことを昨日のこのように思い出す。

貴子はいつも落ち着いている。教室でも、廊下でも。クラス替えの朝も、びっくりしたような顔はしていたが、むしろ面白がるような表情だったのが印象に残っていた。自分の苛立ちが彼女に伝わらないのが融には歯がゆかった。融が世界に自分の居場所を確保しようとあくせくしているのに、貴子はいつも自然にその場にいるというのが目障りだった。天気がいいなら、今年も星が見えるだろうか。

昨年は山を歩くコースだったのだが、降るような星を見たのが強く印象に残っていた。周囲に何もなく真っ暗だったせいもあるのだろう。

③ 本当に、粉砂糖をまぶしたような満天の星だった。地面に寝転がって空を見ていると、星空の奥に自分の身体が落ちていくような身震いを感じた。

ほてった足を道路に投げ出して、空を見上げたことを懐かしく思い出す。今年もあんな空が見られたらいいのに。

でも、今年も平野部のコースだから、明るくて見えないかもしれない

な。

融はゆつくりと窓を閉めた。すっかり部屋の中が冷えこんでいる。

みんな、夜、歩く。それだけのことがどうしてこんなに特別ななんだろう。

そう考えて、ふと、それが自分ではなく誰か他の人間の台詞だったことを思い出す。

誰だったろう？ 男かな、女かな。

融はぼんやりと考えた。やがて誰の台詞か考えるのに疲れ、その台詞の意味の方に意識が移っていった。

そう。ただみんな歩いていてだけなのに、この夜は特別だ。

不思議と、つらい記憶は残っていない。つらくはないはずはない。足がマメだらけになり、最後の方は声も出ないほどなのに、毎年度の「ピクニック」の前日にはすっかりそんなことは忘れてしまっている。記憶に残っているのは、みんなで何かと興奮し、高揚した気分で騒ぎまくって歩いていた夜のことばかり。粉砂糖をまぶしたような星空や、途中でO Bや生徒の家族が配ってくれた甘いキャラメルのことばかり。朝の畔道あせみちで、ゆつくりと空に昇ってくる大きな太陽のことばかり――

どの場面も、既に遠い記憶のようにセピア色だった。うんざりするだけに思えたこの年月も、その場面を巻き戻している時だけは愛しく思えた。

予報によると、明日は一日晴天が望めそうだ。

私はじつと音のない星空を見上げていた。

明日はとうとう高校生活最後の「ピクニック」。

私はそののどかな響きが気に入っていた。およそ実態はその響きに似つかわしくないハードなもののだが、それを「ピクニック」という無邪気な言葉で形容してしまうところが愉快だった。

私はそれをとっても楽しみにしていた。みんなで共有する、その特別な長い一日を。他愛もなく交わされる会話、夜中、相手の顔も見えない闇の中で打ち明けられる秘密の話。いつもと同じただの夜が、明日は永遠の夜になる。

私はあの二人と話すことも楽しみにしていた。

甲田貴子と西脇融。

この二人が異母きょうだいであることを知っているのは恐らく私だけだろう。私があることを知ったのは、ある偶然がきっかけだった。私は、別にその事実を誰かに教えようとか、みんなにバラそうなどと考えたことはなかった。なぜか私はそのことを知っているだけでひどく満足だった。同じクラスになり、互いに知らん振りをしている二人を眺めているだけで心がイ和むものを感じるのには不思議だった。

けれども私は、二人を見ているうちにある一つの計画を思い付いた。

とても個人的な、秘密の計画を。

私は今回の「ピクニック」でそれを実行してみようと考えている。さ
さやかな計画、ささやかな私の野望を。

ゆつくりと星空を見上げる。この空は明日に繋が^{つな}がっていて、あと数時
間もすればみんながこの空に向かって歩き出す。

みんなが夜歩く。たったそれだけのことが、どうしてあんなに特別の
ことなんだろう。

今はただ丁寧に一人で準備をしよう。学園生活、そして人生における
つかのまの「ピクニック」のために。

(恩田陸 『図書室の海』「ピクニックの準備」 新潮社)

A たかをくくっていた

ア、ずいぶん前から予想していた

イ、いつかそうなると覚悟をしていた

ウ、些細なことだと見ぬふりをしていた

エ、思いもよらない出来事に驚いていた

オ、たいしたことはないと思われていた

B 大仰な

ア、曖昧な

イ、過激な

ウ、緩やかな

エ、大げさな

オ、魅力的な

C 面食らう

ア、突然の出来事に、驚きあわてる

イ、思い通りの出来事に、ほくそ笑む

ウ、予想通りの出来事に、がっかりする

エ、想像以上の出来事に、気持ちがひるむ

オ、気分が乗らない出来事に、うんざりする

問一、——線1・2のカタカナを漢字に直しなさい。

問二、——線ア・イの漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

問三、……線A～Cの語句の文中での意味として、最も適切なものを次
のア～オの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

問四、——線①「時々馬鹿らしくなり」とありますが、誰がどのようなことに対して、「馬鹿らしくな」っているのですか、簡潔に説明しなさい。

問五、——線②「ハチマキの布地は、つるつるして針を通しにくかった」

とありますが、この表現について説明したものととして、最も適切なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア、自分の気持ちを押しつけたような態度を貴子に取らせてしまっている母親の反省を暗示している。

イ、自分の気持ちを後回しにしてしまうほど貴子につらい思いをさせている母親の後悔を暗示している。

ウ、融に対して取るべき態度がわからない貴子のもどかしさを暗示している。

エ、融に対して思わず強い態度を取ってしまう貴子の精神的な弱さを暗示している。

オ、母親に対して感じていることをなかなか言えずに困っている貴子の危うさを暗示している。

問六、 には、どのような言葉が入りますか。最も適切なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア、配偶者
イ、共犯者
ウ、主犯者
エ、影武者
オ、傍観者

問七、——線③「本当に、粉砂糖をまぶしたような満天の星だった」とありますが、ここで見られる表現技法として、最も適切なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア、直喩
イ、暗喩（隠喩）
ウ、体言止め
エ、倒置法
オ、擬人法

問八、次のア～オの文章を読み、本文の内容と合っているものには○、合っていないものには×を答えなさい。

ア、貴子と融が初めて会ったのは、受験勉強一色の生活に突入しようとする寒い冬の雨の日だった。

イ、融と同じクラスになった貴子は、融を意識しないふりをしていたが、少しずつ融に対する好意が膨らんでいるのを感じていた。

ウ、同じ父親を持ちながらも母親の立場が違うことが、融の貴子に対する見方に影響を及ぼしている。

エ、融と貴子の交際が噂になったのは、ふたりが異母きょうだいであることを知っている「私」がバラしたせいだと融は思っている。

オ、貴子と融と「私」は同級生であり、それぞれの立場で明日行われる北高鍛錬歩行祭の準備をしている。

